

成果報告書

2026年 4月 12日

公益財団法人 乃村文化財団 理事長 渡辺 勝 様

貴財団の助成金事業についてご報告します。

助成区分	教育普及活動助成	
研究および教育普及活動の期間	2025年 4月 ~ 2026年 3月	
フリガナ	カイツカシリツシゼンユウガクカン	
大学（研究室等）名 学会・博物館名	貝塚市立自然遊学館	
フリガナ	アサクラ ユキヒロ	職名
代表者名	朝倉 幸博	館長
フリガナ	テンマ カズヒサ	職名
担当者名	天満 和久	博士研究員
所在地	大阪府貝塚市二色3丁目26-1	
対象となる研究および教育普及活動の概要	【テーマ】	空間展示 音と光のシンクロシティ 命の螺旋
	【目的】	地球上の命のつながりについて、さまざまな生きものに生息環境を提供するマイクロハビタットとしての「樹洞」に焦点を当て、表面上は衰弱しているようにも見える樹洞のある大きな樹、自然物が創り出す唯一無二の存在としての形態的な美しさを空間展示の中に取り入れた。それによって、尊い命や多様性豊かな生きものつながりを表現することを目的とした展示を制作した。見方の違い、「科学の見方」を「アートの見方」にしてみるなど、『鑑賞者が“自分なりに”見る・感じる・考えることで、より想像力を働かせることのできる空間』を創造することを目的とした。
	【実施体制】	当館職員及び協働事業体である自然遊学館わくわくクラブが中心となり、フィールド調査を実施し、展示物として標本となる生きものの採集とそれらの生息環境などを表現した制作物の作成に取り組んだ。前回の助成事業でのつながりが深い同市内の企業の方にも樹洞制作の協力を要請した。採集や展示のできない生きものは、現地沖縄本島在住の折り紙作家の方にも生物模型の制作を依頼した。同様に、大学や博物館などにも協力を要請して、所蔵標本の調査なども行い、種分化などの形態的差異をデジタル化し、制作物にも反映させた。
	【実施方法】	フィールド調査において、樹洞を利用する生きものを中心に調査し、樹洞を中心とした生きものつながりなども調べた。特に、生態的にも特殊な生きものとして、アイフィンガーガエルを生体展示するとともに、クロギリスの仲間は写真や造形物を制作して展示した。また、できるだけ多くの樹洞を写真で記録し、主要な樹洞は3Dデジタル展示も行った。展示については、春季と秋季に開催したミニ企画展、当館の2階への階段を利用した3月からの企画特別展をその機会とした。鳴き声など現地の生の音源を収録した“音”、樹洞の暗闇の対比となる“光”などを映像や立体模型とともに、標本と合わせて展示し、フィールドでの感覚をつなぐよう、アート思考で対象物を捉える機会を提供した。映像表現では、映像に合わせて自らが制作した音源を導入するため、「音作り」にも挑戦した。
【成果と社会的効果】	科学的視点と芸術的視点を兼ね備えた“もの”の見方を育んでいただける機会を提供することに加え、新たな表現方法でフィールドと館内をより深くつなぎ合わせた『自然生態系展示』を創出し、人と自然の価値ある情報を共有できる豊かな空間を形成できたと考えている。もの見方を変えることにより、自然に対する意識の変化を生み出し、博物館の展示普及活動への理解が深まり、人と人・人とモノ・人と生きものなど、さまざまなコミュニケーションがさらに広がるのが来館者の方々の反応からも期待することができた。また、制作過程や体験を通じ、世代間の交流や次世代の育成などの成果と社会的効果も非常に大きかったと感じている。	
共同研究者等の有無	なし あり (人数 6 名) ・自然遊学館わくわくクラブ（協働事業体）：鞍井由利（専門学校2年）、鞍井希凞（高校1年）、鞍井依子（会社員）、藤原一旭（大学院修士2年） ・日本紙工株式会社（協働企業）：高橋誠（部長）、木岡幸子（課長）	
助成金額	100 万円	主な用途 フルスクラッチの生物模型、樹洞制作用資材、フィールド調査の旅費、映像展示用の備品費等

研究室名 学会・博物館名	貝塚市立自然遊学館
テーマ	空間展示 音と光のシンクロシティ 命の螺旋
【目的】	
2025年日本国際博覧会の開催におけるテーマに連動し、「いのち」、つまり「生物＝二重らせん構造」というものを意識したものとした。地球上の命のつながりについて、隠れ家や繁殖場所、越冬場所としての利用など、さまざまな生きものの生息環境を提供するマイクロハビタットとしての「樹洞（じゅどう）」に焦点を当てた。表面上は衰弱しているようにも見える樹洞のある大きな樹、自然物が創り出す唯一無二の存在としての形態的な美しさを空間展示の中に取り入れた。それによって、尊い命やそのつながりを表現することを目的とした展示を制作した。また、見方の違い、「科学の見方」を「アートの見方」にしてみるなど、多様性豊かな生きもののつながりを表現し、感性を刺激し、自然物への関心と好奇心を高めてもらえるような展示を目指し、『鑑賞者が“自分なりに”見る・感じる・考えることで、より想像力を働かせることのできる空間』を創造することを目的とした。あわせて、研究者だけでなく、市民協働・次世代の育成、また企業連携など、さまざまな交流を通じた地域連携を図ることも大きな目的とした。	
【実施体制】	
当館職員及び協働事業体である自然遊学館わくわくクラブが中心となり、フィールド調査を実施し、展示物として標本となる生きものの採集とそれらの生息環境などを表現した制作物の作成に取り組んだ。前回の助成事業でのつながりが深い同市内の企業（日本紙工株式会社）の方にもサステナブル素材である段ボールの調達や樹洞制作の協力を要請した。採集や展示のできない生きものは、現地沖縄本島在住の折り紙作家の方にはフルスクラッチの生物模型の制作を依頼した。樹洞展示に関連した樹木関係の素材は、林業関係の方にも素材となるものの調達・提供を依頼した。 大阪公立大学大学院の平井規央教授、大阪市立自然史博物館の松本吏樹郎主任学芸員、一般財団法人 自然環境研究センターの元陳力昇博士らなどの大学や博物館などには、所蔵標本の調査などの使用やフィールド調査の結果などの意見交換などの協力を依頼し、写真撮影や種分化などの形態的差異をデジタル化し、制作物にも反映させた。3Dデジタル化については、御所市教育委員会文化財課の金澤雄太係長に指導協力を依頼した。	
【実施方法】	
フィールド調査において、樹洞を利用する生きものを中心に調査し、樹洞を中心とした生きものつながりなども調べた。調査の際には、多種多様な樹洞を写真で記録した。主要な樹洞についてはさまざまな角度から撮影し、芸術的感性をかきたてるように、3Dデジタル展示も行った。特に、ファイトテルマータである樹洞内の水たまりを利用して繁殖を行うアイフィンガーガエルについては、館内の生体展示に加えて、採集時の映像や鳴き声なども展示に組み入れた。クロギリスの仲間は、種分化などの形態的な差異などを詳細に調べてデジタル化し、展示モニターで紹介するとともに、段ボールでの造形物を制作して展示した。映像表現では、クリエイティブ・コンソールなども使用してデジタルアート作品を制作することに加えて、映像に合わせて自らが制作した音源を導入するため、シンセサイザーなども使用しながら「音作り」にも挑戦した。 春季と秋季に展示室で開催したミニ企画展はフィールド調査による標本と映像、生体を中心としたもので、本助成金事業の集大成となる2026年3月から開催した当館2階への階段をアートギャラリー的に利用した企画特別展では、“階段をのぼる”＝“木を登る”というようなイメージで、段ボールを基盤材料とした樹洞を有する“大樹”（四分一立体ともいえる四分円柱）を制作し、踊り場をPalier Daru（ダリュの踊り場）的要素として、その位置に樹洞を配置した造形物を制作展示した。“大樹”には当館のガラス張りの2階からの外光の日周変化をうまく取り込み、一日の陽光による光と影の変化も楽しめるものとした。これを展示の柱とし、鳴き声など現地の生の音源を収録した“音”、光の存在を際立たせる樹洞の暗闇との対比となる“光”を、映像や立体模型とともに展示し、フィールドでの感覚をつなぎながら、アート思考で対象物を捉える機会を提供した。そこには、実際のスギやヒノキの“小端（こば）”を用い、フィトンチッドの効果も利用しながら、実際にフィールドに“居る感覚”を“匂い”も使い、五感に響かせて再現した。	

研究室名 学会・博物館名	貝塚市立自然遊学館
テーマ	空間展示 音と光のシンクロシティ 命の螺旋

【研究・教育普及活動の成果】

科学的視点と芸術的視点を兼ね備えた“もの”の見方を育む機会を提供することに加え、新たな表現方法でフィールドと館内をより深くつなぎ合わせた『自然生態系展示』を創出し、人と自然の価値ある情報を共有できる豊かな空間を形成できるものとする。これは、標本という実物である“本物”をどのように魅せるかにより、来館者の方々が種の照合作業をするだけのような見物だけでなく、標本の魅力を最大限に伝えることで、実際にそれらが自然界を生き抜く生息環境をイメージしやすくなり、一度“実際にフィールドでその姿を見たい”というような欲求に駆り立てられる、そのような展示空間ができたと考えている。一方では、標本という実物を見ることによる“大きさや質感”などの感覚を直感的に理解して感じとれることができることが博物館の特質でもありと考えている。

『バブルの遺産建築』ともとれる当館の構造の負の部分を変え、貴財団からの今回の助成金事業は前回のものと合わせて大きな成果として捉えることができる。前回の2Dから3Dへの展示なども継続・継承しながら展示し、来館者の増大とその方々からも非常に評価をいただいていることがすべてである。これは、貴財団からの助成を拝受したことで、芸術的視点を科学的な展示の中に組み込む機会を得たことが最大の契機となった。

生命の星・地球にあって、「曖昧で不規則、完全でない命のカタチから何を感じるか」、「脈々と続く生命を考え、朽ちるまで生き抜く姿に何を思うか」、今回の“樹洞”を見ていただき、地球45億年に思いを馳せ、大樹の鼓動から脈々と続く生命を感じ、美しいと感じることができたなら、これからの輝く未来をデザインできるのではないだろうかと考えている。

こうした経緯を含め、この一年間の助成期間を通じ、フィールド調査に加えて、企画展の開催など、次代を切り開いていく子どもを含めた若者たちとともに、助成事業の企画にはじまり、一つの目標“助成いただいたことに恥じない成果を公表する”に向かって、確固たる信念をもちながら突き進んだことが大きな成果のひとつ「人としての成長」へと導いたことは確実である。成果物を実現させるための勇気と努力、最後まであきらめない精神力、自然界の危険性への対処方法など、これはまさに“自己を超越した大樹”が他者への寄り添いとも感じ取れる深く大きなつながりを感じる存在、そこに彼ら若者の存在が共鳴しながら、非因果的であれ“共起”することができたと思う。

これについては、研究者はもちろんのこと、企業の方々も含め、多くの方々に協力をいただきながらさまざまな世代や分野といった大きな交流と次世代の育成というテーマにも貢献できる成果を導き出したと考えている。

最後に、前回の助成金事業の際と同様に、日本未記載種を含めた科学的な新たな発見などもあり、今後の学会発表や論文発表など、科学分野に対する貢献や成果も得ることができた。



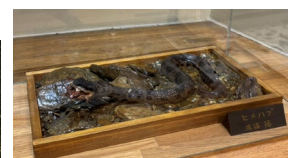
春季ミニ企画展のポスター



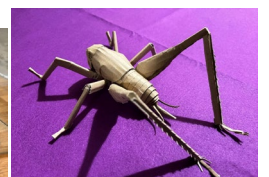
「美の探求～あなたが求める美しさとは?～」での展示



企画特別展「音と光のシンクロシティ～命の螺旋～」



フルスクラッチの3Dモデルのヒメハブ



段ボール制作のヤエヤマクロギリス



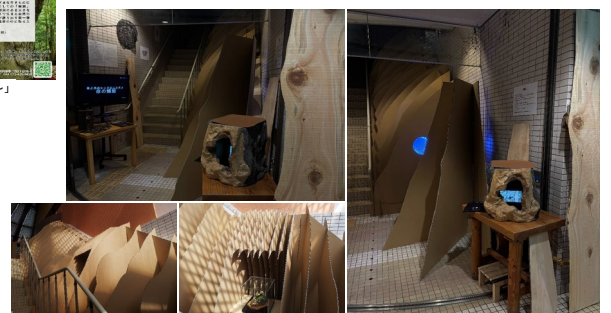
秋季ミニ企画展のポスター



「石垣展～沖縄の生きもの～」での展示



ヤエヤマクロギリス



造形物“大樹”光と影の演出

研究室名 学会・博物館名	貝塚市立自然遊学館
テーマ	空間展示 音と光のシンクロシティ 命の螺旋

【今後の成果の活用と活動の展開について】

科学的視点と芸術的視点を兼ね備えた空間が広がり、ものを見方を変えることにより、自然に対する意識の変化を生み出し、博物館の展示普及活動への理解が深まり、人と人・モノと人・生きものとヒトなど、さまざまなコミュニケーションも広がることを期待する。しかし、そこにはそれらを紡いでいくキュレーターとして人、そして将来へ実物のものとしての標本を残すための“標本師”のような存在、クリエイティブに作品を作り上げるアーティストが必要であることを少しずつでも社会に浸透させていきたいと考えている。それらすべてが介在する空間こそが、単なる収蔵するだけの箱モノではなく、人が深く関わり、そうした機能を備えた博物館のような存在であると信じている。

また、博物館や美術館などの新たな利活用の促進のための一つの空間として、標本やアート作品の価値を増大させることはもちろんのこと、人間生活におけるさまざまな空間（今回は一つの例として「踊り場」）を本来の目的に加えて、付加的な利用価値も高めることで、ゆとりのある気分を醸し出す豊かな空間を配置できることを望む。一方で、多様な利用の促進という観点からも、そのことがさまざまな意味での安全性を高めることができるものでもあると考える。

貴財団からの前回の助成金事業と合わせ、生物多様性豊かな琉球列島の島々の貴重な標本を所蔵することができ、科学的な研究材料が増えてきたことはもちろんのこと、やはり博物館や美術館が進めるデジタル化において、大きく進展させていただいていることは事実である。

また、さまざまな観点での新たな取り組みは次世代の若者たちの探求心・好奇心、そしてそこから得られる達成感など、次世代の育成という点では彼ら自身が責任感を持って行動できるまでに成長していく自分を改めて見つめる素晴らしい機会となっている。その中で、今回のようにサステナブルな素材である段ボールに対して、非常に関連性のある木そのものというよりも柱を製材する際に出る端材のような“小端（こば）”というものに触れることができたのも素晴らしい機会であった。なによりも、それに携ってきた方々の歴史性にも触れることができた。“小端（こば）”を提供いただいた方は江戸時代からの屋号で営業されている方である。そうした悠久の時を感じながら生きること、まさに“大樹”のような存在とのつながりに抱かれて、人は成長するのだということを改めて認識することである。

さまざまなモノを制作する過程や体験を通じて、世代間の交流や次世代の育成などの成果と社会的効果も大きい。このような経験をもとに、研究的な分野、芸術的な分野などさまざまな方向に自信をもって進んでいく機会が提供できたものと思う。博物館はそうした「人と人・モノと人・生きものとヒトなど、さまざまなコミュニケーションも広がるような“場”であり、そうした空間を作ることも大きな役割であると考えている。いずれにしても、すべて本助成金でこのような機会を与えていただいた公益財団法人乃村文化財団の方々に深く感謝したい。



フィールド調査の様子



作画・作曲の様子



造形物“大樹”設置の様子



樹木の根っこの掘り上げ作業



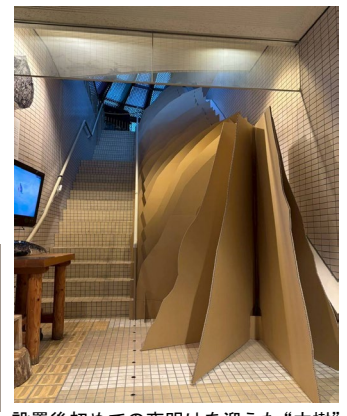
樹洞展示の制作



3Dモデルの樹洞制作過程



ボールペン画によるアイフィンガーガエル



設置後初めての夜明けを迎えた“大樹”